

英語は大学教育のどこで使われているのか

Where is English used in university education?

国際戦略推進機構・基盤教育部門・小池文人¹

キーワード：英語、研究トレーニング、全学教育、専門教育

外国語キーワード：English, liberal arts education, research training, specialized education

要旨

英語は大学教育のさまざまな場面で使われる。語学としての学習のほか、国際理解の道具や、専門教育の道具としても使われている。この研究では横浜国立大学の学生や教員にアンケートを行い、英語に関わるどのような活動が、どの学年でどの程度行われているのかを調査した。アンケートの回答数はそれほど多くなく個人によるばらつきも大きかったが、およその傾向が得られた。本学の教育では、学部入学直後の全学教育英語科目の授業がひとつのピークを形成し、その後の学部3年生で英語に関する活動が低下した。英語を道具として使う講義などは大学院入学直後にひとつのピークを形成した。大学院への進学が多い理系の学生では4年生から専門の文献を読むために英語が使われ始め、大学院では学年が上がるごとに増加した。また博士課程の学生では文献を読むほか英語を使った論文執筆も顕著であった。入学時から積算した英語活動は学部2年生までは文系で多かったが、4年生以上では逆転して理系の方が多くなった。大学における英語教育は上記の実情をふまえることが望ましい。中等教育において英語は文系科目とされることもあるが、大学ではむしろ理系のカリキュラムで多用されていた。

Abstract

English is used in various aspects of university education as language learning, a tool for international understanding and professional education. In this study, a questionnaire to students and faculties was conducted to obtain the amount and types of activities related to English. Much activities were found immediately after admission in the undergraduate program as language classes, and then declined in the third year. Lectures that use English as a tool formed a peak immediately after entering graduate school. For science and engineering students who often go on to graduate school, the use of English for reading scientific papers and books began in the fourth year, and increased in graduate school. Doctoral students showed a marked tendency to write papers in English in addition to reading the literature. The cumulative English activities was higher in students belonging to cultural and social-science education programs until the

¹ ORCID iD Fumito Koike <https://orcid.org/0000-0002-6588-6485>

second year of undergraduate, but in the fourth year and above more activities were detected in science and engineering programs. English language education needs to take into account such realities.

1. はじめに

グローバル化が進行しているため英語力が重要であるとして初等・中等教育で英語教育の強化が進む一方で²、仕事におけるニーズの調査データに基づいて実際の社会ではあまり英語が使われていないとの調査結果もある（寺沢 2015）。大学教育は中等教育と社会を仲介する位置にあるが、大学教育の中での英語の利用についての情報はあまりない。大学の専門教育では社会のニーズを直接受けながら専門性の高い仕事に向けた教育が実施されている。卒業生の全てが専門的な職業につくわけではないので、社会の平均値や卒業生の仕事の平均値より専門性が高い教育が行われるが、大学専門教育の英語利用を調べることでカリキュラムが理想とする職業人における英語の必要性が見えてくると思われる。他方で全学教育は中等教育の発展であると受講学生に受け止められる場合があり、両者をつなぐ取り組みも望まれる。この研究では、大学1年生で受ける全学教育から博士課程にいたる、大学・大学院の全課程での英語使用時間をアンケートにより調査した。

2. 方法

2021年夏に学生と教員に対してアンケートを行った。英語教育連絡調整会議のメンバーを通して全学部に依頼し、教員から自研究室の学生に依頼するかたちとした。

学生向けのアンケートでは入学から現在の学年（最高学年は博士後期課程3年）までに横浜国立大学において各学年で英語に関わる活動に費やした日数を問い合わせた（付録）。90分の授業を15回受けると3日に相当する。活動内容は、語学としての活動（語学授業、語学学校や自主留学³、TOEIC受験勉強など）、英語で学ぶ授業（全学科目、専門科目など）、自分の研究に関する英語での文献情報収集や文献紹介ゼミへの参加、英語での研究発表やその準備、英語研究論文執筆、大学行事での英語を使う旅行（インターン、海外調査、学会参加旅行など）の6カテゴリーごとに回答を求めた。

教員に向けたアンケートでは、学生アンケートの各カテゴリーに対応する教員の活動時間について学生の学年ごとに回答を求めた。ゼミのように複数学年を対象とした授業は、合計日数が教員の活動日数となるよう按分か人数の多い学年にまとめて回答するよう依頼

² 文部科学省. 今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～.

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm

³ 夏期休暇などの短期の語学留学であり、専門の授業を履修する派遣留学ではない。

した。なお調査対象は COVID-19 の影響がない時期の状態とした。学生と教員ともに改善アイデアや支援してほしい事項などを自由記述回答とした。ただし本稿では自由記述の内容については割愛する。

回答者によるばらつきが大きいと思われたため、平均値ではなく極端な値の影響を受けにくい四分位値を用いて集計した。学生が入学してから卒業するまでに経験する英語活動の軌跡は、各学年の中央値の活動量を毎年続けると仮定して、大学入学からの積算活動日数を求め、ブートストラップ検定を行った⁴。同様に第一四分位を継続した軌跡と、第三四分位を継続した軌跡を求めた。

3. 結果

回答数は 13 研究室、教員 12 名、学生 104 名であった。理工学部では全 EP の教務委員の研究室から回答があった。回答研究室数が少なかったため学部ごとの解析は行わず文系と理系の 2 タイプに分けた (表 1)。学生アンケートでは回答学生の低学年時の情報も得られる (表 2)。ただしカリキュラム改定前の情報が含まれている可能性がある。

入学以降の全ての英語活動を合計した積算日数は、2 年生までは文系学生の方がやや多かったが、3 年生で有意な差がなくなり、4 年生以上では理系学生の方が多かった ($P < 0.05$)。ただし文系学生の修士 2 年以上はデータが得られなかったため比較できない。英語活動の積算日数の中央値は、学部 4 年の時点で文系学生は 15 日、理系学生は 24 日、修士 2 年では理系学生は 51 日であった。文系学生では語学としての勉強が中心であったが、理系学生は英語を利用した専門教育が多かった (図 1)。積算でなく年あたりの英語活動日数で見ると、学部 1-2 年の語学学習が多く (図 2)、それより上の学年では大学院修士 1 年で専門の授業と研究文献において英語が使われていた。理系学生では英語文献・研究発表・論文執筆を行う専門研究のトレーニングが学部 4 年から始まり、修士課程を経て大学院博士課程を中心に行われていた。英語で情報出力を行う研究発表と論文執筆は博士課程で特に多かった。学生の英語利用に対応して教員の英語に関する教育活動も理系で多い傾向があった (表 3)。

⁴ みんなで GIS, <http://www.minnagis.com/>

表1 回答数

課程	学生	教員	研究室	学部	大学院
文系	29	4	4	経済、経営、都市科学文系	国際社会科学、都市イノベーション文系
理系	75	8	9	理工、都市科学理系	理工、環境情報理系

表2 学生アンケートの解析データ数

課程	学部1年	学部2年	学部3年	学部4年	修士1年	修士2年	博士1年	博士2年	博士3年
文系	26	26	25	19	3	0	0	0	0
理系	65	65	66	65	43	19	8	4	1

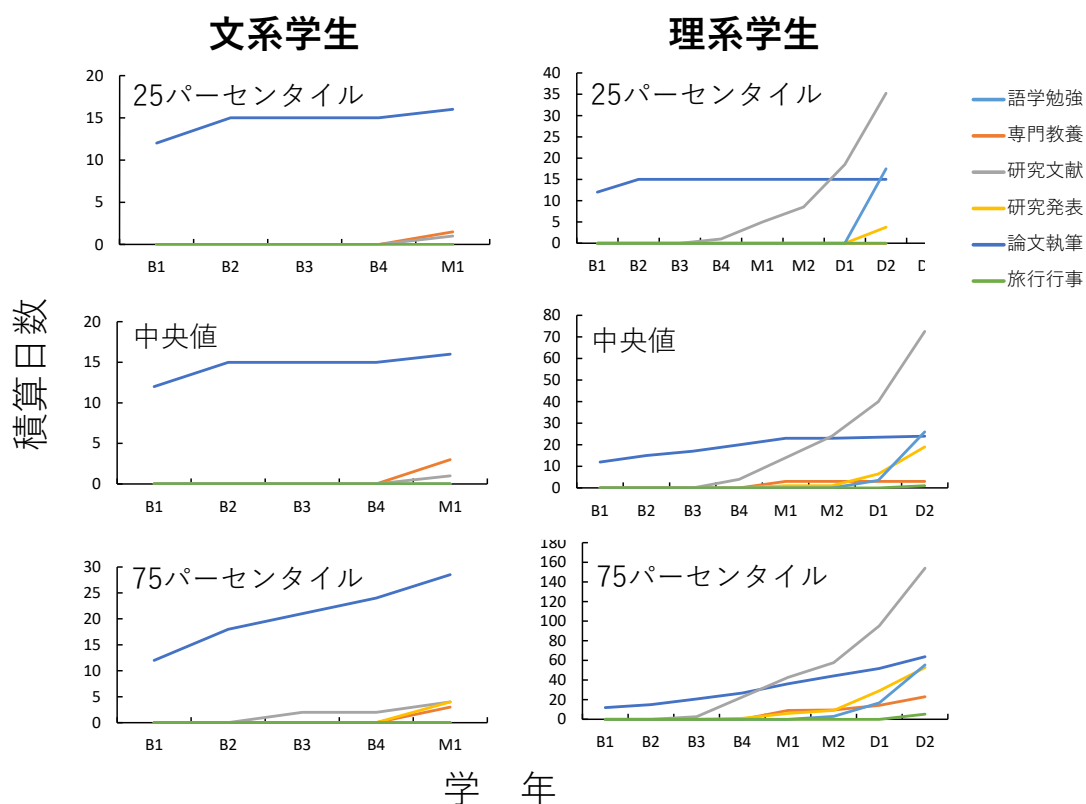


図1. 学生アンケートによる大学入学から積算した英語活動日数。B1-4: 学部1-4年、M1-2: 大学院修士1-2年、D1-3: 大学院博士1-3年。

4. 考察

データ数は少なかったが、文系学生と理系学生で英語活動の量と質に違いがみられた。専門教育での英語利用の中心は大学院であるが(図2)、本学の大学院進学率は理系学部の

理工学部で73.0%、文系学部の経済学部と経営学部では5.3%と2.2%であり、理系学部で進学率が高い⁵。大学院での英語活動は学部教育にも波及し、理系では4年生以上で英語文献の利用がふえていた。理系の3年や4年で英語語学学習が継続してみられたが(図2)、大学院の入試対策や進学後の専門教育に備えた英語学習の可能性がある。

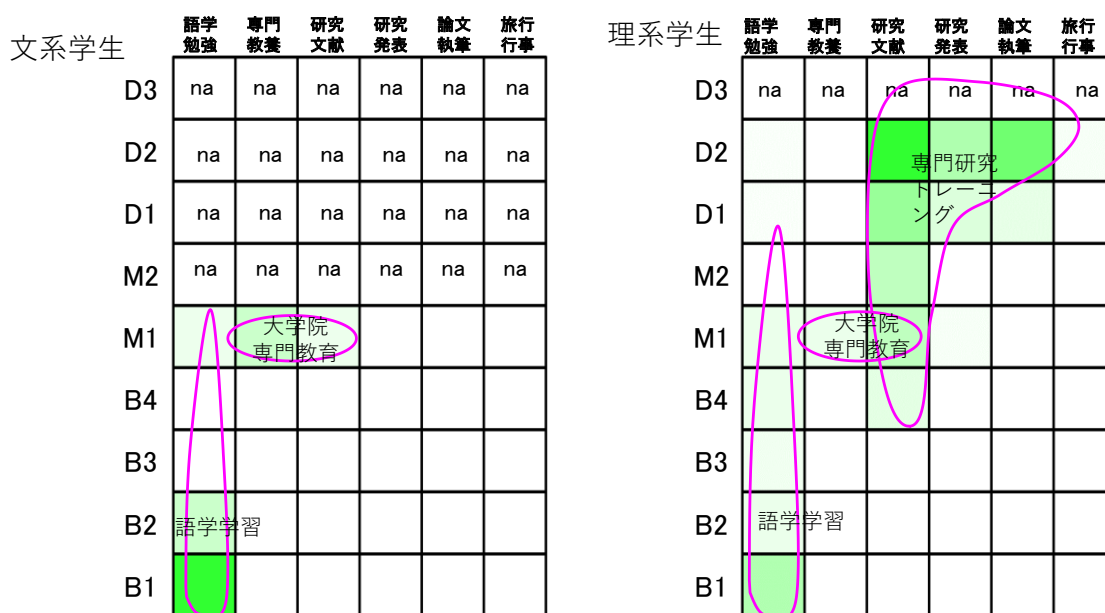


図2. 学生アンケートによる年あたりの英語活動の日数の中央値。

表3. 教員が行う英語に関する教育活動。全ての学年の合計を示す。

活動	文系教員				理系教員			
	第一四分位	中央値	第三四分位	データ数	第一四分位	中央値	第三四分位	データ数
総日数	4.6	7	11.3	4	18	35.8	100.5	8
語学教育担当	0	0	1.5	4	0	0	0	8
専門教養教育	0	1.5	3.5	4	0	1.3	3.8	8
研究文献教育	0	0.8	5.6	4	11.3	18	29.3	8
論文執筆指導	0	0	0	4	2	9	52.5	8
旅行行事引率等	0	0	0.5	4	0	0	3.5	8

⁵ 大学案内「横浜国立大学 2022」 <https://www.ynu.ac.jp/about/public/publish/guide/>

伝統的に英語は文系科目と考えられており、私立大学の文系の入学試験で英語の配点が大きい現象が見られる⁶。しかし本学の大学教育においては理系の専門教育でより多く使われていた。大学院での英語支援のほか、大学低学年の全学教育の英語と専門教育での英語利用の間をつなぐ取り組みが期待される。

参考文献

寺沢拓敬(2015)「日本人と英語」の社会学. 研究社, 東京.

付録 使用したアンケート用紙

学生のみなさま

2021年5月24日

入学してから卒業するまでの間に、英語の授業のほか、研究室での英語文献紹介ゼミや英語学会発表、英語論文執筆なども含む英語の学習と利用がどの程度行われているかを調査しています。

- 横浜国立大学在籍中に、英語に関わる活動に費やした日数を、以下の表にご記入ください。学年ごとに1年あたりの日数として記入します。日中の活動は8時間を1日として換算し、たとえば1.5時間×15回の演習(2単位)や実習(1単位)の授業はそれぞれ3日になります。
- 編入学や大学院からの進学の横浜国立大学に在籍していなかった学年は、表の「学年」欄に横線を引くか、ファイルであれば学年の文字を消去してください。

学年	英語の語学授業・自習、語学学校、TOEIC等受験勉強、留学など(自主留学含む)	英語で専門科目・教養科目を学ぶ授業(専門書講読、海外大学の専門授業など)	自分の研究に関連する英語文献読み、研究発表スライド作成などの準備、(ゼミ、学会、ワークショップ等)	自分の研究の英語論文執筆	大学行事での英語を使う旅行、海外調査・インターン、学会参加旅行
D3					
D2					
D1					
M2					
M1					
B4					
B3					
B2	3日(2単位)				
B1	12日(4単位)				

- これまで在籍した学部名や大学院名、学部： 院修士： 院博士：
現在のあなたの学年、博士 D3、博士 D2、博士 D1、修士 M2、修士 M1、学士 B4

- 全学科目の語学授業の感想や改善点があれば自由に記入してください。
- 英語能力向上について支援してほしいことがあれば自由に記入してください。

提出方法：指導教員などから依頼された場合は依頼者に提出してください。提出先がわからない場合は下記のメールにお送りください。記入した用紙のスマホ写真でもかまいません。
koike-fumito-nx@ynu.ac.jp 小池文人(教授)横浜国立大学、国際戦略推進機構、基盤教育部門

教員のみなさま

2021年5月24日

教員の方々が、学生の英語学習と英語利用に対する支援をどの程度担当されているのか、を調査しています。

大学院教育や専門教育、全学教育の講義のほか、研究室での英語文献紹介ゼミや英語学会発表の指導、学生の英語論文の添削、海外実習の引率なども含みます。

- 支援に関わる活動に費やした日数を、以下の表にご記入ください。学生の学年ごとに1年あたりの日数として記入し、日中の活動は8時間を1日として換算します。たとえば1.5時間×15回の演習(2単位)や実習(1単位)の授業はそれぞれ3日になります。
- 複数の学年の学生が同時に参加するゼミや引率では人数の多い学年にまとめて記入するか、ご負担でなければ人数により按分し合計日数が担当した実際の日数になるようにお願いします。
- 典型的な年として COVID-19の影響がない通常の年度(2019年度など)に担当された日数をご記入ください。

学年	語学としての英語の授業担当(準備を含む)	英語で学ぶ専門・教養の授業担当(英語専門書講読の紹介、国際学発表会、英語論文講読、英語でのゼミ等)	英語を使った研究発表ゼミ(英語文献の紹介、国際学論文の添削(卒業後であれば研究を支援した学年に割り当て下さい))	学生の英語論文の添削(卒業後であれば研究を支援した学年に割り当て下さい)	海外学生活動の引率(最も参加学生数が多い学年への記入でも結構です)
D3					
D2					
D1					
M2					
M1					
B4					
B3					
B2					
B1					

- 学年の略号：博士 D3、博士 D2、博士 D1、修士 M2、修士 M1、学士 B4、学士 B3、学士 B2、学士 B1
- ご担当の学部と大学院をご記入ください。 学部： 大学院：
- 学部入学から大学院までを通した学生の語学能力向上での改善点やアイデアがあれば、ご自由に記述をお願いします。

提出方法： 学内便でお送り頂くか、下記のメールにファイルをお送りください。記入した用紙のスマホ写真でもかまいません。
koike-fumito-nx@ynu.ac.jp 小池文人(教授、環境情報研究院)
横浜国立大学、国際戦略推進機構、基盤教育部門

⁶ マナビス「2022年度一般選抜(私立大)の仕組み」

https://manabi.benesse.ne.jp/daigaku/nyushi/nyushi_info/ippan_shiritsu.html